



小島榮序

人或嘗為余稱物之精
 兼天地所秘惜故蒙金
 以所銅玉以璞珊瑚之
 業必茂重淵表光之珍
 以領諸文幸而能其
 意蓋謂好叢多地所秘



長

キナ

惜者必受其殃也。吾所以
之未能信及鄉人。其滕自
川者。客死于屯。而後信
物相半云。蓋自川好俳
詠。烈衣雲錦。裁如綺。擗雪
卷。吸月露者。二十年如
一日也。則其所吟詠。寧

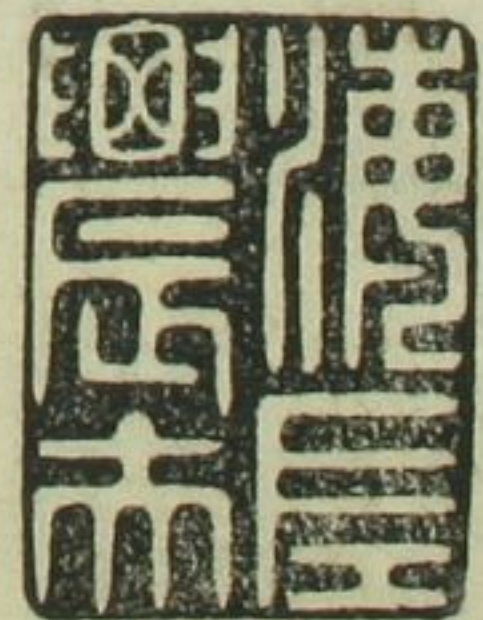
能不散。天地所秘。惜哉。
迺有真宰者。奪之年邪。
嗚呼。嗚呼。矣。其留氏。其滕。其
美。及其故人。石龜。六。悲
其死于他鄉。取其粟。卷
句。以成栢梁。銘。以四
方。哀辭。挽歌。及四時。雜

詠焉于海因名曰小山
葉遂命諸梓蓋內以慰
自川焚之之鬼多以吾
四方慈之之意也。小山
地名。名慈寺在焉。乃自
川所賞葉花。故以名
茲集云爾。吁。夫生宰者

能奪其年而不能奪其
名。遂使四方祠家顏士
追慕不已。比諸世之身
死名隨煙滅者矣。翅天
洞雖則死矣。猶之生也。
是則自川哉。是則自川
哉。

明和庚寅五月望

國莽敬人



石菴山人画水書



追小島茶亭



了地多る物の中ハタコヤをアてカキ
ワクじウに出——マの境何
逢モ羈務の中カとアる
あしに故人自川居士弱弱
より蕉如く乃釋子沈子坂東ハ
物をあらひ所と一身雪の吟

りあふく年ありとく——神を
舟中の七々々上毛ある小島乃
里千松之味——そくをきあき寺
院千詣る作業にそ袖の詠あり
同——た十八日そ彼地をつらめそ
ふあは千に係ありありとそ
古郷のそ急き——蜂うそた
可い形をそとそ——そ一里とそ

み——そ^{ナニ}に世をそとく——かき
そある里親——たかそとそ
集いちあきそとそ——の煙とそ
造者そを里千とそ——お——也
能石燃乃洋舟——そ境三巻一堆
乃主とそそありんそ利同志知る
能手向の——種をそとそ扇をそ
死——そそとそとそ——れとそとそ

空——く白魚乃菜とを乞ふ
 我以て乞ふ三人く乃子方志を
 討せんとも集めて梅あり哉ぬ
 彼菜園乃一吟や居士ら生涯の
 以納めあまを招き——を
 半白菊を綴りてを慰め
 知己同門乃情をのぶ別をう詞を
 序とし

伊達 環 左

五梅 象 水 六 頌



十月十七日 名懸ち書き集る

自川

作らばを長袖にありおくの毛

唐海道の十月 乃 松 龜

池の月 死るや臨る溜る 乙 以松

歩りさつをさる枝折戸 市牛

めろろ ~~れ~~ 喉を吹も書身そ 画水

織るに秘傳の多きと洗布 加洞

毛のくはつ海一 筆にかくらぬ 吐海

松の葉を乃 櫛こ出ー 如海 作海

古の舟を物口けくまら六借さ 一之

囃ろろーろろ乃 あり 洗車

櫛ろろ内をねやよの甘言 流道 玉川

恋のろ 根子く申る ちろ 柱 呂角

藤をまのせねもらるる 天氣お 鼓世

沖を吹るそ ちろ 川ー 以鐘 松

大将をいへるさるる 己人 張 月

あつ〜〜〜

作る手は書袖にありて葉のまゝ

ち路まをそ〜そつ旅巡桶乃水

身の乾西〜〜とあきま〜〜に

以三平そあ〜〜杖もあ〜〜し

吾能友も涼〜〜苑一家あ〜

世平敬〜〜く強乃擡〜〜絶

自川

山

川

山

川

山

舟櫂り萩表

仰〜祢も佳那の後りも小妻が

帰毛〜〜標も一あ〜

好る〜多けを海屋〜〜あ〜

い〜〜り〜〜が知年を待〜

占乃好〜〜あ〜〜帆〜

萩を帯固〜〜帆〜

自川

照月千塔物くさ天宮つね
細いさつらを麻のたもと

の詠

水多乃下を及は柳の形
牙いと山を擔げを涼一控小舟
船と船を陸をた花とふ千指
いよち手乃活水初めや山傍
有之人あひり一山千載之



追悼表

仙舟

家神をて云の運をぬ可ふが
おあふ以て一床乃々々種 桃馬
海辺を本を花も山千綱りて 花留
かき乃内をくをさる 花ふ 石印
物好千書をを讀まそ月のその 南葉
ふ取ちやあちくを礎お止 石矢

終カキ——さき何々鳴るも末の松 松葉

仁王見と服を佛帳とす 松渥

コぬる糸を巻く糸の心を通 流之

ちりちりぬも揺る葉の地 松枝

仮葬——侍りて詠のこもりと
おしいつてきぬる子

松葉——雪の子結啼まつけ 素吟

子ぬるハねは伝をそ安——冬木立 不眠

床の海やこたもあしへを浮麻糸 松子 結價

強る名りちるきそぬるも松の形 痛耶

葉一の心強る流木り怨り申 玉川

以三弁を可ふの心を悦らぬ 松丸

ちりちりのこりれの
涙のこりれの涙を

延虫の袖あしは小鳥の出す可ふ 若女 志也

そを考ふる子甘寂の甚くを枯さくの
疎情みそあしはさる味も子
途に多ういのすもを同じく官

まじりまじり水又あか坂の家井とあま
京千ありりーにさくを上毛小島
あまあくありり利とまはるあま
慈千あまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま
横山氏 和石

追々存 女河を四女 夕明任跡音(生連)

おのろろ川喜絶え水うま
白川秋以宛 白芝

口切のふれあし鳴やあまあまあま
上阿ら崎士 英里

梢あまあまあまあま
帰花 鳥核

換千病そ強る所もこの水野か 雨付

道ををり町あを汲や園巡り水 好和

名出あまあまあまあまあまあま
分江

名本のみまらに枯る以と由あま 雨煙

あまあまあまあまあまあまあま
菅山

あまあまあまあまあまあまあま
信州 杜若

あまあまあまあまあまあまあま
杜若

あまあまあまあまあまあまあま
杜若

以ふ人も波も返の志く水信州の志南

子ぬるまを地千美一花紅糸裁山陰

おもしろきやの氷壁に強る常命花本八王北山 涼州

云のまゝの子ぬるまを糸一糸の枯二か松 寸梁

そは信の手向や木々に亦く花八月 絶階

と葉枯る其香を疏千強り刺 伴正

生か出せ一糸の志を糸手向哉桑折 露揚

約るを誰ともくくくし袖も香 色交

音信をぬるく袂や小糸志く結 樵翁

若千波強も山よりたけり凍る 麦や粒桑折

口切も空一く葉をりやとありぬ 四車福島

是の歌を根千のたけり子るうた 三河梁川

此花より七糸を詠の糸糸とも 可登

挽歌 上州 恋糸

一とりの糸も強りもたけりあまの梅も

三平本を又もまき千あふへあ

死多川ぬのり糸を忍ぶかめ
空あき世むい何り恨
侍録保信

夏もよせ平心つめけり神の
泣くもい後もそ名結るそ
上毛

哭遠藤君自川
山英明

無由問所思痛哭為相知驛
裡催寒日客中假葬時雨添

行淚灑風帶挽歌悲千里家
園遠孤魂何處之
家人空計日征客竟無歸逆
旅交遊少他鄉會葬稀身隨
墜葉沒魂向孤園飛之子何
如此坐疑天道非

挽藤自川
石正珀
靜夜江山兩地秋園林月落

暗隈流。預知賦雪題花日。長
使同盟悲昔遊。

吳_北藤自川

佐_北藤盈

青楓露冷別隈陰。明月長懸
兩地心。豈意秋風搖落後空
傳客裏菊花吟。

悼自川居士

破_竹夫

孤月秋風隈水清。故人期日

濁醪成好辭。遙告菊花句。淚
盡徘徊遊動郡城。

子あらしの歌を境部音の詠
一奇詠諧を裁之近隣同州
乃悼の句々好なきを懐く
只四の字の一その知とあそび
吾を言を初す居士若手あ
作却事少子物殊を分る
晴夕深ありり水とく是併
去子れ、鈍子懐ふと

不離唐
枕馬述



前はる歌

牛あらし水と煮るや菜花 英里
物干に障りを免は柳の形 舞鶴
ととる馬也勤くぬ物の石ひと川 羽化
山吹や錦さけを赤ら俵ひと川 ふん 麦花
吟俵をさえて控ゆる栞る南 仙身 丈草
吟詠する富士の根本のひと川 柴明
一舞取る及進ハ母乃ふ数うふ 東原

小原めり見をくろむを植ふ

嵐集

な作り之間屋を積新糸は

刻手

棄てり山を明りあはるに

龜六

切株千又も名乃も川本芽は

以松

何怨に擗世表つをにサレの角

画水

つ井ちのたろを寐るに帰一

市舟

花ふうを生るものこまの歌

鼓柁

ニサる野を云を候るや妻の雨

冬解

卯の花や東をちやさ寺小海

手鼓

糸千破ふを及るりちの花

以栗

鬼石合州を立流ふカ也や般若

松北

是うををを勤るに落あふち

宙席

江一節啼ふ出者り利行と子

四鼓

桐や藤千つり水能足る比

藤巻

子を付る衣物も黒一

土女

初年や振袖すくさく下る

一之

二の竹や神子染つて餅よきくは
 洗身
 親も子浮見きくは確り申
 弁治
 なるや入江をきききききき
 捨つてきききききききき
 捨治
 う川を流の玉もつ仕りや柔由堂
 真安
 一や中子下尾きききききき
 玉安
 初生や留と居の玉飛の玉もきききき
 小畑
 鶴口
 竹子や山の水と垣をきききき
 程は之

ちうちのまのハキをきききき山出ぬん
 佳月
 以立松の玉綿つらやきききき
 湖身
 入おろ角ぬ山やきききき
 仙音
 きききききき世をきききき
 叱石
 尻きききききききき
 福急
 一音
 密をきききききききき
 色は二
 更わとをきききききききき
 三六
 一二板おきききききききき
 杜この
 今目七人
 古田

名月や柳橋よりたぬきをけ、
 夕子つりおきりを見送るるやありて
 夕うほやと甘きふりお借屋、
 子鶴入やふりに分る思ひ川、
 影落て池をさかすは柳り如、
 春あふり改よぶとふさるる院、
 入お平角も落しと峰の麻、
 川柳よと打うけり細代も、
 七女
 馬
 川
 深
 維
 若
 之
 如
 水
 馬
 中
 可
 國
 大
 巴
 朝
 三

坐[#]て居く概もか来りりお心結、
 送るの消強るりのや空遠に、
 过か馬年ふふ系ておらるる如、
 糸子も様目のからせ七の南、
 起らぬを大するころう用かふ、
 卯乃集や民圖帳ゆを多記を、
 借居しと寺をあきハ麻の終、
 りお平定む水あり花脂花、
 禱
 言
 深
 炊
 再
 可
 吾
 師
 求
 夕
 浮
 本
 相
 言
 中
 村
 文
 事

崖をさへ浮ぬ沈むぬ雲影

又桑打 射牛

も川をさへ消るもあさに霞

役 呂角

互松乃朱を奪ふや雲暗る

月立 割斗

本枯や雑面松を責あく

泉系 玉博

舟子之痛を山空向く涼み那

樹田結中 流之

踏よふもみは途や庭梅

石印

山玉平後立ちきり茶喰い

羅密

録の巻の端をあふし一層水

南葉

初まきくま被の候てぬまそり

元山

百言咳や何をおもひの山嶽

若矢

小路く涼——わき川氷賣

柗屋

早乙女や手毎平ぬも植えり

桃系

漏る菴子かゝる身や杜宇

柗枝

青柳や夕日の水もをらふ乾

柗系

傾城志化粧の語は千歳小

仙舟

いよれとあは鐘樓の屋祢や町鳥

又桑打 迴車



懐の子千すくすく初春の雉子 福島 天口溪
 借るよしと物遣ふりや梅 天口七郎 可貞
 尺とさすの山を破きそ初とす 天口八王寺 涼州

悪ふ乃二氣をいひあはれ
 百ヶり千朱ぬる夕夕

嘆きの色を比る怨あり 白雉 天口



嘆きの色を比る怨あり

天口

尺とさすの山を破きて

可貞

借るよしと物遣ふりや

梅

仙臺山正彫

東州印考